ビューは主に画面の表示に関する処理を書いておくためのものです。helloアプリケーションのviews.pyの初期状態は下記のように書かれています。

from django.shortcuts import render

#Create your views here.

1行目はimport文で、django.shortcutsというところに用意されているrender関数を使えるようにするための記述です。2行目はコメントで、ここからコード入力ができるというコメントです。

Webアプリケーションにアクセスしてきた側(Webブラウザ「クライアント」)に内容を送り返す(response)ためにimport文を追加します。

from django.http import HttpResponse

次に具体的に実行する処理の内容を書いてみます。

def index(request):

　　　return HttpResponse(”Hello Django!!”)

indexという関数を定義している文です。引数にはrequestが渡されています。これは、クライアント側の情報をまとめた「HttpRequest」というクラスのインスタンスです。

HttpResponseクラスはクライアントに送り込む内容をまとめたもので、内容をreturnすることで、引数に書いた内容がそのままクライアント側に送り返されます。

urls.pyファイルはURLを管理するためのものです。先ほど、views.pyにindex関数を作成しました。これを、特定のアドレスにアクセスしたら実行するようにurls.pyに追記しておかなければなりません。

「hello」フォルダ内のviews.pyをhelloという名前でimportします。

import hello.views as hello

このimportしたhelloを利用しているのが、その後のurlpatternsリストです。そこにpath(’hello/’,hello.index),(パス)を追加します。ここでは、’hello/’にアクセスしたら、hello内のindexを実行することを指定しています。Helloというのは、「hello」フォルダ内のviews.pyのことです。つまり、hello/にアクセスしたら、views.pyのindexを実行することをしていたのです。

hello/にアクセス

path(’hello/’,hello.index)

hello.indexを実行

urlpatternsに登録した情報を元に、どのアドレスにアクセスしたらどの処理が呼び出されるかが決まる。

